

漢字調査と「庭訓往来」の漢字

岩 淵 匡

一

古典における漢字調査は、個々の文献について行われることが多く、現代のような大規模な調査は行われにくい。これは、いうまでもなく、各文献の成立年時を特定したり、同時期に成立した、同じような文献を多く集めたりすることに困難が伴うからである。このために、結局、文献の一々を中心とした調査にならざるを得なくなる。

古典の漢字調査も、現代のそれと同様、漢字使用の実態を明らかにするためのものである。当然、広範囲にわたる調査が必要であるが、現在のところ、ごく一部の文献について行われているに過ぎない。特に、似たような文献について多くの調査が行われれば、現代の場合同様、広く用いられる字種、常用の漢字を明確にすることが容易になろう。また、日本語全般にわたる漢字個々の使用状況を明かにすることも可能になるであろう。現在、仮名文献については、『日本語の歴史』第三卷や前田富祺氏などによる

調査があり、漢字使用の実態も明かになってきたが、なお、そこにみられる漢字の性格については今後にまっところが多いようである。

二

漢字調査の結果、そこにあらわれる漢字の性格を明らかにしうらば、調査結果の相互利用も容易にならうが、調査だけで終ってしまふこともないわけではないようである。小稿では、「庭訓往来」を例に、漢字調査の結果からみた、使用漢字の性格を検討してみることとした。なお、「庭訓往来」について用いた検討材料は、次の二つの拙稿である。

○「庭訓往来」に見る漢字使用について——「庭訓往来抄」字種表（稿）⁽³⁾

○使用頻度から見た「庭訓往来」の使用字種——「庭訓往来抄」本文の場合⁽⁴⁾

「庭訓往来」については、すでに日本教育史の分野においてそ

の研究が進められているように、中世から近世にかけての教科書
 の一種であり、中でも近世においては手習の書として寺子屋など
 で多く用いられたものであるという。このことは、「庭訓往来」
 における字種が、当時の社会において日常的なものであり、常用
 の漢字としての性格を有するという条件を満たしているものであ
 ることを、多くの場合に示しているといつてよいであらう。これ
 により、「庭訓往来」が手習の書としての流布を決定づけたもの
 といえる。仮に、日常的な字種を含まずに流布したのであれば、
 その要因は、たとえば、語彙の面とか書簡文の範例集などとして
 の面にあり、漢字以外の要素によることになる。また、往来物と
 呼ばれる文献は多いが、「庭訓往来」のように中世に成立し、近
 世に手習の書として流布したものはないようであるし、各文献の
 内容もさまざまである。手習の書として流布しなかったのは、使
 用漢字以外の点にすぐれた材料があつても、字種上見るべき点が
 なかったためと思われる。こういう中で、「庭訓往来」が手習の
 書として流布したというのは、字種の面で常識的にすぐれたバラ
 ンスを持つものであったのであらう。とすれば、「庭訓往来」の
 字種の検討は、中世近世における漢字使用のあり方について、有
 効な示唆を与えてくれるものと思われる。ここに、「庭訓往来」
 の使用漢字の性格を検討する理由もあるが、そのための方法をど
 うするかということについては問題がないとはいえないようであ
 る。簡便な方法としては、他文献における場合との単純な比較が
 ある。しかし、さまざまな文章様式が存在、文献個々の目的のち
 がいいなどがあり、比較の方法も単純にはいかないように思われ

る。

「庭訓往来」と同様の文献、文章様式も変体漢文であり、教科
 書、特に手習の書としての性格をもつものといったものがあつて
 比較できるのならばこれにこしたことはないが、まずこうした条
 件を満たすものはないであらうし、せいぜい、漢文資料としての
 「千字文」が、これに近いものといえよう。

また、「庭訓往来」が実用書であり、文学書ではないことと、
 今日まで行われてきている、古典の漢字調査が、いずれも文学書
 であつて実用書についてのものがないことは「庭訓往来」との対
 比をむずかしくしうである。公刊されている総索引類(漢字)
 についても同様のことがいえる。

しかし、これでは、なんらの進展もないことになるので、とり
 あえず、すでに公にされている漢字調査や漢字索引を利用するこ
 とにより幾分たりとも見通しを得ることとした。

ところで、資料の一つとして可能性をもつものに古辞書類(と
 その漢字索引)がある。古辞書類には、周知の通り、語彙リスト
 として作成され、その漢字表記形が示されているものと、漢字リ
 ストとして作成され、そのよみを明かにするものがある。たと
 えは、前者には「字類抄」「節用集」などをあげることができ、
 後者には「名義抄」「倭玉篇」などをあげることができる。前者
 は国語を漢字で表記するためのものであるから、使用漢字の範囲
 はそれほど拡がらず、常用の漢字の範囲をさしてこえないものと
 考えられる。一方、後者は、主として漢籍仏典類を読むためのも
 のであるから、漢字の範囲も常用の域を大幅にこえているものと

予想される。しかし、古辞書類に収められた語彙、漢字について、基礎的なもの、常用のものが明かにされていない以上、一般には用いられないものも含まれる場合があることを予想し、検討資料からは取り除くこととした。

以上のことをふまえながら、問題もあるが、漢字索引や漢字調査の結果が公にされているものを検討のための資料とすることにした。これらの資料としては、「古事記」⁽⁶⁾「日本書紀」⁽⁷⁾「万葉集」⁽⁸⁾「風土記」⁽⁹⁾「古語拾遺」⁽¹⁰⁾「日本書紀」⁽¹¹⁾「懷風藻」⁽¹²⁾「土左日記」⁽¹³⁾「伊勢物語」⁽¹⁴⁾「竹取物語」⁽¹⁵⁾「源氏物語」⁽¹⁶⁾「更級日記」⁽¹⁷⁾「今昔物語集」⁽¹⁸⁾「平家物語」⁽¹⁹⁾「徒然草」⁽²⁰⁾「かたこと」⁽²¹⁾「奥の細道」⁽²²⁾などをあげることができる。

さて、これらを見ると、

漢字専用時代の文献

漢字仮名併用時代の文献

変体漢文文献

かな文献

漢字かな交り文献

というふうに分けることができよう。いずれの文献とも対比は考えられるが、その第一として漢字専用時代の文献をあげることができる。「日本書紀」「懷風藻」を除くと、変体漢文文献もしくは万葉仮名文献である。「古事記」から「日本書紀」までが対象となる。が今回は、これらのうち「古事記」「万葉集」をとりあげ、このほかに「日本書紀」もとり上げることにした。

漢字仮名併用時代の変体漢文文献も当然対象としなければならない

ないが、該当するものとして「今昔物語集」があるにすぎない。もっとも、「今昔物語集」はいうまでもなく漢字片仮名交り文であり、一部に変体漢文調の文章を含むにすぎない。⁽²³⁾そこでいささか片手落ちの感があるが、他に漢字索引や漢字調査がないため、変体漢文文献は、漢字専用時代のものにとどめた。

かな文献としては、いずれも文学作品である。書写年代は、中世のものが多く、これらのうちから、書承過程における漢字、かなの問題を考えるのに便利な「土左日記」を対象とした。

漢字かな交り文献は、数は多くないが、和漢混淆文、擬古文系のものがある。文学書として「平家物語」「徒然草」「奥の細道」があり、実用書として「かたこと」がある。「庭訓往来」との関連から、実用書の一つである「かたこと」を対象とすることにした。

なお、現代の文献としては、「常用漢字表」をはじめ、国立国語研究所その他による大規模な漢字調査、また、明治の文献についての前記、前田氏の調査⁽²⁴⁾などがある。今回は、とりあえず、「常用漢字表」を参考にし、その他は、別の機会に改めて検討することとした。

以上、「古事記」「万葉集」「日本書紀」「土左日記」「かたこと」の場合について検討するが、言語量の多少をはじめ、バランスを欠く面も少くない。しかし、このような文献との対比によって、「庭訓往来」の使用字種の性格を明らかにすることの可能性を検討する材料としてみたい。バランスを欠く点、資料のかたよりなどについては、別に考えることとした。

三

漢字調査の対象項目としては、字種、字体、音訓、使用頻度、意味、用法などがあるが、総索引や古典の漢字調査ではこのすべてがカバーされることはない。また、目的が異なるため、資料内部に自ずと示されていて、明記していないものもある。そこで、もっとも明確な、字種と使用頻度についてとり上げることにした。資料によっては字種のみのものである。字体は、活字本や総索引では不明確であるので、いずれも標準的な字体を仮に定めることとし、異体字などは、整理された形になるので取りあげる対象とはしない。なお、「常用漢字表」(「当用漢字表」)「当用漢字字体表」及び『新字源』『大字典』により字体を定めてある。

四

漢字専用時代における対比資料としては、次の拙稿によった。
 ○日本語における基本字種——古代前期の文献資料から⁽²⁵⁾
 ○古代主要文献に共通する漢字について⁽²⁶⁾
 右の資料と、前記「庭訓往来」の資料との対比による。
 「古事記」「日本書紀」「万葉集」の三書は、いうまでもなく、内容、文章様式ともに異なるわけだが、一定以上の言語量をもつ点、古典の中でも特に秀いでた資料である。従って、今回の検討の中でも信頼度の高い結果が期待できよう。
 字種を右の、四書間で対比すると次のような結果となる。

四書に共通する字種	九〇二字 (53.7%)
庭訓往来といずれかの書と共通する字種	
庭訓往来にのみある字種	六〇八 (36.2%)
計	一七一 (10.2%)
	一六八一 (100.1%)

「古事記」「日本書紀」「万葉集」のいずれかと一致する「庭訓往来」の字種は合計で一五一〇字(八九・九パーセント)にのぼる。従って、古代以来使用されてきた字種によって構成されているのが「庭訓往来」であるといってもよい。「庭訓往来」においては、時代による字種の交代がないとさえ考えられよう。「庭訓往来」のみにみえる一七一字は、その点では、時代による字種交代の結果とも考えられるが、「古事記」の字種数が一五〇七であることを考えると、交代の結果というよりも、追加されたものという考え方も可能であろう。新しい事柄の表現のためともいえる。「風土記」を加えた、「古事記」以下の書に共通する字種が一〇六八であるから、「古事記」以下の書と共通する「庭訓往来」の字種数は非常に高い割合である。もっとも「日本書紀」には三五一三字あるわけだから、この数字と比較するとかなり小さい。ところで、「古事記」以下の三書と「庭訓往来」との共通字種は九〇二字(五三・七パーセント)であるから急激に数が小さくなる。この字種数が、日本語における基本的な字種の反映であるとする、約半数は、交代の可能性があることになる。

一方、「庭訓往来」と「古事記」以下の三書に共通する字種が

古代のそれ／＼の文献にどの程度の割合で存在するかをみると次の通りである。

	異なり字数	比率(%)
庭訓往来	一六八一	五三・七
古事記	一五〇七	五九・九
日本書紀	三五一三	二五・七
万葉集	二五〇一	三六・一

「古事記」は全体数が少いので別としても、他の文献との比率はそれほど高くない。要するに古代文献にあらわれる漢字の一部が用いられているにすぎない。しかし、「庭訓往来」はその一部で、かなりの部分をまかなっているのである。

一方、「庭訓往来」にのみみえる字種はどのような字種であろうか。使用度と「常用漢字表」との関連の上でみると次表の通り

使用度	表外字	表内字	計
11	0	1	1
10	0	0	0
9	0	2	2
8	0	1	1
7	0	0	0
6	1	0	1
5	3	1	4
4	0	1	1
3	5	2	7
2	28	2	30
1	109	15	124
計(%)	146 (85.4)	25 (14.6)	171 (100.0)

である。使用度は、十一以下であり、使用度一の、表外字が圧倒的に多い。現代における漢字使用の面からも一般的には使用度の低い漢字の集団ということができよう。

また、全体的にも表外字の使用が多い。もちろん、古代以来の字種にも表外字や使用度の低い字が見えるが、「庭訓往来」にのみみえる漢字群には顕著にあらわれる。

さて、このうち、表内字はわずかで二十五字であるが、以下に示しておく。

茶餅着様帽札券忙坪痢团局幅店悠掲裁棧畑血粧縹紋膜豚

特に使用度の高いものは「茶」、(使用頻度一一)、「餅・着」(使用頻度九)、「様」(使用頻度八)の四字である。表内字を含むことを考えれば、現代の用字と近似するものであり、古代文献にあらわれないことから中世以降使用が高まる漢字群といえそうであるが、表内字の占める割合が小さい点、将来とも使用度が高まる漢字群とは考えにくい。使用度の低いものが圧倒的に多いことから、一般性よりも特殊性の強い漢字と見なしておきたい。「庭訓往来」では、書簡文一般の表記ではなく、語彙集団の表記に主として用いられる。

古代文献三書に共通する字種が約五〇パーセント、いずれか一以上のものに共通するという点からは約九〇パーセントになるが、古代文献と「庭訓往来」とでは、使用字種に共通性が高く、時代性による字種の交代は少ないものと予想される。「庭訓往来」にのみみえる字種は、使用度も低く、表外字が圧倒的である点から特殊性の強いものといつてよさそうである。この点を差引くなら

らば、一般に、「庭訓往来」の字種は基本性が高いといえる。

五

仮名文資料との対比については、仮名文献個々にみえる漢字使用の特殊性を考慮する必要がある。仮名文献各種に用いられる漢字にある程度の枠があつて共通性も見い出されるにしろ、文献個々に語表記のありようはまかせられている。漢字表記、仮名表記を決定づけるものは何もないというべきであらう。語彙や表現の異同はすべての写本にみられるにしろ、漢字か仮名かの異同にくらべれば概して少い。

そうした仮名文献の中にあつて「土左日記」は、書写年代と漢字使用の関係についての見きわめが容易な、唯一の文献であらう。貫之自筆本を直接書写した各伝本とそれらを転写したものが「土左日記」の写本群であるからである。すなわち、漢字表記という点で貫之自筆本をどう改変したかを明確に知りうる。今、「日本大学図書館蔵『土左日記』解説」により各写本の漢字数を計算すると次の通りである。

	異なり字	延べ字	異なり語	延べ語
為家本	三四	六二	二一	四一
定家本	一〇四	六三一	一〇三	六二三
宗綱本	六二	一八五	五三	一六六
実隆本	八七	四九三	八五	四六八

いうまでもなく、各写本は、貫之自筆本を直接書写し、それに忠実であるはずであるが、漢字数の上では表のような差異がでてくる。書写者の違いによる差ともいえる。ちなみに書写年代は十三世紀より十五世紀末以降に及ぶが、古いものに漢字が多いとか少いとかというのではない。

為家本は、貫之自筆本にほとんど一致すると考えられているので、為家本の数字は、貫之自筆本におけるそれと考えてよい。三十四字の内容は次の通りである。

京日子願講師白散故院記一文字十郎等字多五色明神病人不用中将相応寺干

なお、右のうち、「庭訓往来」にみえないのは「応」一字である。また、右の三四字が各写本の中でどう保存されているかをみると、貫之自筆本において「五色」「不用」と表記される語について、「五色」は定家本で「五しき」、「不用」は三本とも「ふ用」となるほかは同じである。「不」を「ふ」とするのは、「不」の草体の仮名「ふ」と「不」の草体との字体が類似しているため判別が困難である結果、それぞれの写本が「ふ用」と読んだためである。ちなみに「五色」「不用」の各写本での用例数は、各一例である。

右で見たごとく、貫之自筆本を直接書写した各写本においては、貫之自筆本にみえる漢字表記語は忠実に保存し、その他書写者の私意により漢字を使用していることになる。しかし、これは恐らく「土左日記」の特殊性で、他の一般写本ではもっと自由に書写されているのではなからうか。

各写本のうち、定家本以下三本の漢字使用数はそれぞれ異なるが、これは書写年代とは無関係のようである。漢字数のもっとも多い定家本は十三世紀前半の書写、もっとも少い宗綱本も、実隆本と同様十五世紀末以降の書写である。従って年代とともに漢字数がふえるわけではない。各写本ともあくまでも私意による漢字使用なのであろう。

ところで、各写本の使用漢字についてみると次の通りであるが、もっとも多い、定家本を中心にみることにする。

人見舟心所風浪物月日又思時神京山猶松河海也夜家花水女方
白中子哥名春仏地桂年住世願講師散千雲吹鳥申身院故文字原
仲忘袖声記上下一十郎等波藤橘宇多霜川東枝雨吉鷹影秋葉哉
事雪西五恋行草明二江病者久柳相応寺宮有梅返用将
また、定家本にみえないものは

都国野手色（宗綱本、実隆本）

君別妙酒空（宗綱本）

津昨昔浦虫玉暮代程頼香庭（実隆本）

で、右のうち傍線を引いてあるものが定家本のみにみえるものである。

これらのうち、為家本にみえる漢字は、音使用のものも多く特殊であるが、それらを除くと、他の仮名文献にあらわれる字種が多い。仮名文献においても、多くの文献に共通して用いられるものと、固有名詞などの表記のように、特定の文献にのみ表われるものとに分けられる。為家本（貫之自筆本）にみえるものは、特定の文献にのみみられる特殊な字種の例でもあろう。

ところで、「土左日記」における漢字と「庭訓往来」とを比較すると、

浪哥桂郎霜鷹秋柳応（定家本）

君（宗綱本） 昨昔虫暮（実隆本）

の十四字が庭訓往来にみえない。全体で一二六字であるから十パーセント強ということになる。右のうち、「桂霜鷹柳」は、定家本のみにみえ、「浪哥郎秋応」は、定家本を含む三本に共通する。また、「常用漢字表」に含まれないのは「哥桂鷹」の三字で、「哥」を「歌」と考えると、現代では使用されることの多い字種が含まれていることになる。

なお、前田富祺氏の調査結果を借用するならば、⁽²⁸⁾「御物本更級日記」と「土左日記（定家本）」と共通するものが、次の通りである。

人見舟心所風浪物月日又思時神京山猶松河海也夜家花水女方
中名仏地年世千雲申原上十東雨秋葉事雪西五江相寺宮梅将
の五四字ある。「御物本更級日記」には、全体で一二二字の異なる字があり、そのほぼ半数が「土左日記（定家本）」と共通することになる。同じ書写者でも語彙の違いがあり共通する度合がそれほど高くないのだから、⁽²⁸⁾「庭訓往来」と「土左日記（定家本）」との一致度は高い。仮名文献は、全体に漢字数が少いことも一致する割合が低くなることなのであろうが、「庭訓往来」の場合の一致する度合の高さは奇妙といえは奇妙である。

以上の通り、仮名文献の一である「土左日記」各写本と「庭訓往来」とは使用する字種の一致の度合が高く、「庭訓往来」自体、

一般性の高い字種を使用している割合が高いことを示している。
う。

六

漢字かな交り文献としては、「かたこと」を「庭訓往来」との比較の対象にする。「かたこと」は、その序文によれば、著者、安原貞室が、その子に對しことばづかいを教える目的で編んだものという。これに従えば、「庭訓往来」同様、言語教育のための教科書の一種であり、従って実用の書である。教える内容は異なるが、その目的は一である。慶安三年の刊ということは、「庭訓往来」の近世における各板の板行よりも早いくらいである。漢字かな交り文と変体漢文という文章様式上の差はあるが、近世初頭に常用の漢字としての共通の意識があれば、この両書の漢字使用

	表内字	表外字	計
庭訓往来	一一六〇字	五二一字	一六八一字
庭訓往来及 かたこと	八二四	一八九	一〇二三
庭訓往来の み	三三六	三三二	六六八
かたこと	一〇七四	四五七	一五三一
かたこと及 庭訓往来	八二四	一八九	一〇二三
かたことの み	二五〇	二六八	五一八

には似たものがあるはずである。しかし、両書の漢字の合致の度合は、上に示す通り、必ずしも高いとはいえない。すなわち、「庭訓往来」「かたこと」の両書に共通する漢字は一〇一三字で、「庭訓往来」全字種一六八一の約六〇パーセントを占めるにすぎない。ところが、右の一〇一三字は、古代文献と共通するものが多く、次の五四字のみが古代文献にはあらわれない。

傀^{*}偏^{*}兔^{*}勾^{*}喝^{*}团^{*}員^{*}帽^{*}惣^{*}授^{*}札^{*}枇^{*}柑^{*}柚^{*}裁^{*}棹^{*}棹^{*}把^{*}沽^{*}灸^{*}理^{*}琵琶^{*}顛^{*}血^{*}碗^{*}
着^{*}筥^{*}築^{*}粥^{*}粽^{*}羯^{*}茶^{*}筵^{*}茶^{*}葡萄^{*}蠟^{*}装^{*}註^{*}豚^{*}蹄^{*}鼎^{*}膝^{*}釘^{*}鉸^{*}鑼^{*}闊^{*}鞞^{*}餅^{*}饅^{*}麪^{*}

(×印は表外字)

右にみる通り、その多くは表外字であって、「庭訓往来」での使用度は概して低いようである。

この一〇一三字の九五パーセントが古代文献に一致するということは、「庭訓往来」と「かたこと」の両書の使用漢字が、基本的なものにとどめられていることを示すのではないだろうか。たしかに、それぞれの書にのみみられるものが、約四〇パーセントもあり、一見して矛盾しているかのようにみえるが、このうちの約半数は表外字である。これらのことは、両書の構成にもかかわることで、両書のもつ語彙集的部分や語彙掲出部分にこうした漢字が使用されるとすると、その他の一般文章の部分に、前記六〇パーセントを占める漢字がより多く用いられることになる。この一般文章部分に用いられる可能性をもつ漢字のうち表外字は一八九字しかなく、比較的少いといえよう。

以上のように考えると、六〇パーセントとはいえ、文章部分に占める割合はかなり高くなるので、基本的なものが使われるとい

う可能性も大きくなろう。

「庭訓往来」にのみみえる三三六字も使用度は概して低い。使用度十以上のものは次の九字にすぎない。

任式雖被諸軍随難預（×印表外字）

「雖被」などは、「庭訓往来」が変体漢文であることによるうが、全般的には、文章様式とのかわりも少いようである。結局、内容上の問題と考えられる。このことは、「庭訓往来」「かたこと」が教科書であるという性格に由来するものとみた方がよいであろう。

表外字を多く含む点は、今日における使用度もさほど高くならないことが予想され、全体として、語彙集的部分との関連、あるいは、語彙掲出部分との関連が高いことから、日常的、常用的漢字が、前記の六〇パーセントの中におさまるものが多いということになったものと思われる。すなわち、この六〇パーセントを占める多くの漢字が一般文章を書き表すための基本的字種ということになるのではなからうか。

七

「庭訓往来」と古代前期の文献、仮名文献、漢文かな交り文献との対比を試みたが、具体的な字種はほとんど掲げていない。しかし、共通する字種の占める比率を考えれば、具体性に欠けるものの、「庭訓往来」にみられる漢字使用の実態の一面を知ることにはできる。また、そこにみられる漢字の性格も予想がつこう。時代とともに字種が変わっていくという予想に反し、それぞれの文

献相互に高率の一致度を示していることは、「庭訓往来」の使用字種が基本的なものを中心としていることを示すのではなからうか。確かに、前記の文献中の字種と一致をしないものもあるが、これらはもっぱら、「庭訓往来」の語彙集の部分に関連するもので使用度も決して高くない。一致するもののすべてが、使用度が高いわけではないが、広範囲な使用が考えられる。「庭訓往来」の書簡部分を中心に用いられているものが多く、基本的とでもいうべき文字群ではなからうか。

注(1) 一八〇ページ

(2) 前田富祺「仮名文における文字使用について——変体仮名と漢字使用の実態——」(東北大学教養部紀要 第十四号 昭46)

(3) 学術研究 国語・国文学編 第三十四号(昭60) 所載

(4) 学術研究 国語・国文学編 第三十五号(昭61) 所載

(5) 石川謙「庭訓往来についての研究——教科書の取扱方から見た学習方法の発達——」(金子書房 昭25)、『日本教科書大系古往来(三)解説(講談社 昭43)、石川松太郎「庭訓往来」解説(平凡社 昭48)

(6) 『古事記総索引』(平凡社 昭49)

(7) 『日本書紀総索引』(角川書店 昭39~43)

(8) 『万葉集総索引』(平凡社 昭49)

(9) 『風土記の研究並びに漢字索引』(風間書房 昭47)

(10) 「古語拾遺漢字索引」(富田大同、明石工業高専研究紀要17・18 昭50・51)

(11) 『説話の語文 日本霊異記漢字索引』(桜楓社 昭50)

- (12) 『懷風藻漢字索引』(日本上代史研究会 昭32)
 (13) 『土佐日記總索引』解説(桜楓社 昭42)
 (14) (15) 注1・注2文献
 (16) (17) 注2文献
 (18) 『今昔物語集漢字索引』(笠間書院 昭59)
 (19) 松本淳子「平家物語の漢字の字数について」(学習院大学 国語国文学会誌 第八号 昭40)
 (20) 佐藤武義『徒然草』の用字研究——漢字の使用を中心に——(宮城教育大学紀要 第四卷 昭44)
 (21) 拙稿『かたこと』における使用漢字」(學術研究 国語 国文学編 第三十六号 昭62)
 (22) 前田富祺『奥の細道』の漢字」(宮城学院女子大学研究 論文集28 昭41)
 (23) 漢文訓読調、変体漢文調、和文調の三種の文章様式を有する(馬淵和夫博士)。
 (24) 前田富祺『坊っちゃん』の漢字」(宮城学院女子大学日本文学ノート2 昭42)
 (25) 學術研究 国語・国文学編 第二十四号(昭50)
 (26) 學術研究 国語・国文学編 第二十五号(昭51)
 (27) 注13文献
 (28) 注2文献

新刊紹介

上坂信男著

『源氏物語転生—演劇史にみる—』

源氏物語享受に関する著書を近年相次いで上梓して来た著者が、演劇におけるそれと取り組んだ書である。謡曲、浄瑠璃といった古典演劇は言うに及ばず、現代歌舞伎、

文楽、新劇その他からラジオ、テレビドラマや映画に至るまでほとんどすべての分野を網羅してあるが、圧巻は大半を占める現代のもので、本書の特色を為している。

「まえがき」にもあるように、源氏物語はあらゆる時代に愛され、様々な形で再生を遂げて来た稀有な作品であり、そうした面からの原作への回帰は今後新しい「読み」を開拓する上での極めて有効な視点となる

と思われ、本書はまさに時代の要請に答えたいものと言えよう。最後に要を得た原作のまとめが付されているので初心者にもわかりやすく、源氏ブームの折から、専門以外の方にも是非一読を勧めたい。

(昭62・11 右文書院 A5判 五六六頁 七八〇〇円) [山田利博]